

近代日本における「床の間の空間」の一考察 —擬洋風建築「盛美館」を題材として—

田端 香里

◆序論

「床の間」は、日本の住宅建築や茶室の片隅に設けられた小さな空間である。建築史においては、重要性が認識されながらも、発祥や歴史についての定説がない。床の間史研究では、「日本建築の象徴」として扱われ、その時代は室町から安土桃山、江戸がほとんどであり、近代とりわけ明治期の言及はほとんどなく、空白の状態になっている。また、現代の床の間に関する書籍は「どのように床の間を設けるか」という手引書のようなものに散見されるように、「和風志向」の色を帯びている。

さて、明治維新以降の日本はしばしば、西洋化あるいは近代化と称されるが、こうした歴史観に基づけば、床の間にもなんらかの変化があったことが推測される。本稿ではその視点から、明治期の擬洋風建築という一傾向をもった建造物を考察し、その床の間の空間の意匠から、当時その空間に求められた役割を明らかにする試みを行いたい。

本論に入る前に、便宜上、床の間の用語について簡単な定義をしたい。論者によってさまざまな呼称があるが、本稿では基本要素の「床」¹、棚を「床脇」、さらに机に由来する、障子が嵌められている部分を「書院」と呼ぶ。この三点のうち、床を含んだ組み合わせ、もしくは床のみの空間を「床の間」とし、擬洋風建築における上記の要件を満たすものを、「床の間の空間」とし、区別をした。

1. 床の間

床の間の発生には、さまざまな説がある。仏壇の形式が変化したとする説、上段が起源である説、棚であったという説、座るため、寝るための場であったとする説などである。建築史では、建物の内部に部屋の仕切りがほとんどなく、屏風や几帳を用いて仕切りとした寝殿造から、襖などの建具を用いて建物の内部が区切られた書院造への変化の中で、床の間の空間も作りつけになったと推測されている。

現存する書院造の遺構には、書院が床を兼ね、脇には棚が配された慈照寺東求堂²、それに比べて規模が大きく、背面に人物図が描かれた妙法院³などが初期書院造のものとして著名である。一方曼殊院⁴書院一の間は、書院造の中でも簡素さや風趣を重んじた数奇屋風の代表建築で、床には角柱を用い、壁にも絵は描かれていない。また、茶室ではより風情を重んじる意匠がとられ、裏千家咄々斎⁵は曲がった木材を四角く加工することなく用いているのもそうした趣向によるものである。

床の間の空間の存在の理由は、初期には権力者の豊かさや学芸に関する素養を提示する場であった一方、茶の湯の数奇屋風建築の中で簡素なしつらいのものも好まれるようになる。近代以降の床の間にはこの影響が大きいとされている⁶。

これらのことから端的に、押板および床の間の特徴として「仏事」「身分性」「美術鑑賞」「室内装飾」「収納」の5つをあげることができる。とりわけ、「仏事」の由来は、不可侵な領域としての性格を、現在に残す要因とも考えられよう。

さらに江戸期以降の一般住宅では、こうした機能に加え、「格式」を示すために習慣的に作られる性格をより強くしたことが、太田博太郎によって指摘されている⁷。床の間の活用を第一の目的とせず、季節や行事に対応した飾り替えをすることなく過ごすような、現代の床の間の扱いに通じるものがある。

以上、床の間の特徴を概観した。次章では、擬洋風建築を考察したい。

2. 擬洋風建築

擬洋風建築とは、日本の大工たちが「洋風」に見えるように建てた建築を指す。

これは、欧米から招聘された西洋人⁸や、西洋建築についてアカデミックな教育を受けた近代の建築家による建造物と区別される。前者の建造物は、国力を増強するための工場をはじめとする、政府による大規模な物件に多く見られ、その規模を支えるために構造を西洋に真似る必要があった。また西洋建築の知識を持った建築家は西洋の建築を日本に再現する傾向がある。

一方、学校や役所、病院、富裕層の邸宅に見られる擬洋風建築は、意匠を真似、壁や骨組みにおける構造は元来の技法を用いる。ここで看過できないのは、「洋風」としてひとつの括りにされたさまざまな異国の様式から意匠を取り出し、組み合わせ採用していたという点である。そのため、建物に特定の西洋の様式を当てはめて捉えることができない。

擬洋風を代表する学校建築として、旧開智学校⁹を挙げたい。唐破風¹⁰を備えたバルコニーの上には、塔が乗っている。また、天使というキリスト教文化のモチーフと、またそれとは異なる竜のモチーフがあり、これらは漆喰¹¹を用いて作られる。仏教建築としては、宝山寺獅子閣¹²がある。ベランダにかかるアーチや、両開きの窓といった意匠の一方で、舞台として用いられたベランダがあり、懸造¹³で建造されている。最後に、旧鶴岡警察署庁舎¹⁴は地方自治体による

建造物の代表例である。入母屋¹⁵の一階に方形の上層を乗せるお城の技法で、瓦の屋根を持つ。上層のペランダや、窓の造形に意匠が凝らされている。

擬洋風建築は、木造に石を貼り石造に見立てる、瓦屋根に塔を設けるなど、それぞれにまったく異なった表現を持つ。様式よりも建築の傾向という認識に留めておく必要がある。

3. 盛美館

では具体例として、青森県平川市にある「盛美館」(図1)を見ていく。

所有する清藤家は、13世紀から続く地主の家系である。24代盛美(1847-1914)は1902(明治35)年に大石武学流¹⁶の庭師を招き、1911(明治44)年に庭園「盛美園」(図2)が完成した。この庭は、1953(昭和28)年に文部省の文化財史跡指定を受け、国の名勝に指定されている。しばしば名庭と称されるように、この指定の主眼はあくまで庭にある。

庭園は「真」「行」「草」¹⁷で構成される。建物の北側には、西側から真の築山¹⁸、池、行の築山が連なり、松、楓、つつじが配される。ふたつの築山の間には、津軽平野の梵珠山が借景¹⁹となっている。建物北西から西側にかけては、「草」にあたる平庭で、刈込で表現された梅、鶴、亀が配置されている。

盛美館は庭園の一角として、造園中の1908(明治42)年に竣工した。地元の宮大工、西谷市助が建造し、左官は西谷の弟の珠吉であることが分かっている。現在の清藤家当主、27代茂夫氏によると、建物は当初、家族や客人が庭を鑑賞する目的で建設され、実際には土地の農家の人との面会なども行われた。家族の生活はほとんど隣接した母屋で行っていたが、建物の荒廃を防ぐため、茂夫氏の居室および仕事場として利用していた時期を経て、現在は文化財として公開されている。

まず目を引くのは、意匠が上下で異なっていることである。一階は着色が施されず、室内には真壁²⁰が用いられ、庭に面した部分は、引き戸を開け放つことができる。二階には屋根にドームが取り付けられ、大壁²¹造りである。また、二階では窓以外は開かない。こうした特徴が、この建物が擬洋風と呼ばれる所以と考えられるが、上下でいわゆる洋と和を分けているものは珍しい。

一階は、居室が三室と浴室、便所、二階は、居室三室と展望室がある。展望室は、「空中楼閣」の別称を持つように、宙に浮いた感覚で庭を鑑賞できるのが、他の部屋にはない特徴である。このうち、床の間の空間がある一階「客間」と二階「主人室」、「婦人室」の三部屋の意匠について詳しく見ていこう。

a. 一階「客間」(図3)

十畳の部屋の北側と東側が縁側、庭園に面し、西側に床脇、床、書院の三つを備えた、畳敷きの部屋である。書院の窓は蜘蛛の巣を模しており、さらに床柱の中央部分が分断され、奥にえぐれた形になっ

ている。床脇は、落掛²²よりも一段下がった高さに長押²³を配し、床の間の広さがより強調される印象を受ける。

壁には、扇の形に抜いた狛潜²⁴(図4)と、透かし(図5)があり、こまかい意匠は芯を通して固定されている。この透かしは、床脇側からは壁を抜いた形だが、床側から見ると額のような意匠が施されている。部屋が北側に面しているため、採光の目的が推測されるが、機能性だけではないことが興味深い。

床脇と書院を備え、また素材にも貴重な黒檀を用いているが、床が畳ではなく板であることや、書院窓や狛潜などの採光部分、床柱の扱いを見ると、風趣を表しながらも格式を重んじた形式といえる。

また、北と東には、縁側と部屋を仕切る障子が計8枚ある。曇りガラスの中を丸く抜いた窓が嵌められ、庭を絵画のように切り取って望むことができる。この二辺は庭に開放することもでき、客間からは庭のほぼ全体を眺められる。正客を招くことを想定した部屋として、格式と庭の眺望を重視した意図が窺える。

続いて、二階である。二階の居室三室はいずれも畳敷きで²⁵、壁は漆喰のスタッコと砂壁の仕上げである。天井は漆喰塗り仕上げで、それぞれの部屋に異なる装飾がある。

b. 二階「主人室」(図6)

この部屋の床は、部屋の西北側に位置する付床である。床の左側には腰高窓の位置に明かり障子²⁶がある。観音開きの窓が北側に二箇所、東側に一箇所あり、縦に長い楕円に抜かれた曇りガラスが嵌められ、一階同様、座ったときに、円の中に庭を見ることができる。

床の上部は、雲板²⁷を漆喰で表現した形だが、通常雲板が背面の壁のみに取り付けられるのに対し、向かって右の壁に張り出して床の立体感を表している造形が興味深い。床板と同じところまで張り出した先では、垂直下に降りる柱状の部分があり、背面のそれと同じ高さで止まっている。これにより、鑑賞者は直方体の空間を想定し、その中に軸や置物を鑑賞することになる。この造形は、壁のみの床が部屋全体に与える開放感と、しっかりと区切られた空間を併せ持つ。

c. 二階「婦人室」(図7)

婦人室の床の間の空間は、地袋²⁸が床板の役割を果たしており、床脇風の意匠である。地袋の戸は、この部屋の襖、開き戸と同じ意匠をとっている。

主人室同様に漆喰のスタッコ塗り(図8)で床が形成されているが、主人室の床柱が木材だったのに対し、こちらは大理石を模した漆喰の造形である。落掛と一体化し、門のような意匠を表している。床柱に使う木材を重視するのが床の間であるとすれば、この空間はまさに床の間の空間と呼べる。この細工や、天井の中央部分(図9)に見られるように、西洋

では型に流し込む、彫刻するという方法で造られる造形を、漆喰で盛りつけていくことで表現しているのが特徴的である。こうした細工によって、置かれる美術品だけではなく、床の間の空間そのものが鑑賞の対象になっている。

この部屋の窓は東側に観音開きのもの、南側に片開きの計三枚のガラスがあり、いずれも主人室と同形状で、東側には「草の庭」を臨むことができる。床の間は木材の使用が最低限に抑えられていること、床脇との折衷であることから、形式は略式で、客室、主人室に比べ私的な空間であることが明白である。

◆まとめ

盛美館の床の間の空間を、床の間史の基準で見れば、「身心性」や、太田の述べるところの「格式」は接客の形式となって現れている。一階で最も見晴らしのよい客間に、最も立派な作りの床の間があることを考えても、床の間を備えた格式のある部屋に客人を通すことが、相手に敬意を払い礼儀を尽くす態度を示すことになり、反対にその部屋に通さないことで相手との身分の違いを示すことができる。しかし二階に関しては、客人を通すこともあったとはいえ、私室にわざわざ洋の意匠を取り入れた床の間の空間を設けたことは、格式だけでは説明できない。

大工の西谷は、ユカに畳を敷くことにこだわっていたと、茂夫氏が証言している。庭を見るための窓が、ユカに座るときの視線に合わせた高さになっていることにも分かるように、床の間の空間もまた、ユカに座ることを前提とした「美術鑑賞」の方法として採択され、美術品を飾り鑑賞する行為を固定化する役割があったと推測される。さらに、意匠の自由度は高くても、庭や建物の一部として、関連性をもって機能していることも分かる。

もちろん、これがこの時代を代表する建築であると明言することはできず、すべての擬洋風建築に床の間が置かれるわけではない。しかし盛美館には、住宅の新しい素材や意匠を得てもなお、床の間、あるいはそれに類似する空間が設けられた。そこには、この時代の床の間に課された役割が、改めて意識化され具現化されていると考えられる。擬洋風建築における「床の間の空間」を、明治期、ひいては日本建築史上の「床の間」のひとつとして解釈する必要性を提言し、本論の結論に替えたい。

注

1. 「床」は「トコ」と読み、室内のユカについてはカナ表記としている。
2. 京都市左京区、1485年（国宝）。
3. 京都市東山区、1619年（重要文化財）。
4. 京都市左京区、17世紀（重要文化財）。
5. 京都市上京区、1855年。
6. 前久夫『床の間のはなし』114頁。

7. 太田博太郎『床の間：日本住宅の象徴』181-189頁。
8. 明治維新以降、先進国の学芸、技術、制度を摂取するために招かれた欧米は、お雇い外国人と呼ばれた。建築に携わった人物ではアイルランド出身の T.ウォートルス（1842-92）や、イギリス出身の J.コンドル（1852-1920）が知られる。
9. 長野県松本市、1876年（重要文化財）。
10. 破風（屋根の妻側において山形に取り付けられた板、およびその付属物の総称）のひとつ。
11. 石灰に砂、糊、スサなどを混ぜて水で練ったもの、または塗ったもの。
12. 奈良県生駒市、1884年（重要文化財）。
13. 社寺建築、住宅、僧房などにおいて、山または崖に持たせかけ、あるいは水の上に掛け渡して造られた建物（以下略、同上書）。同じ工法を用いるものとしては、音羽山清水寺の本堂（1633年再建、京都市東山区、国宝）が著名。
14. 山形県鶴岡市、1884年（県指定重要文化財）。
15. 屋根形式の一。上部を切妻造りの形式にし、その四方に庇屋根を付けた形式。
16. 江戸期、津軽藩（当時のこの地域）に起こった作庭の流派のひとつ。
17. 華道、俳諧、庭園などで、「真」は正格、「草」は崩した風雅の形、「行」はその中間を指す。
18. 庭園などに土砂や岩石などで築かれた人工の山。
19. 庭園外の遠山や樹木をその庭のものであるかのように利用してあること。また、そのような造園法。
20. 和風木造建築における伝統的構法で、壁を柱と柱の間に納め、柱が外面に現れる壁。壁は柱を貫に通して受ける。伝統的構法では小舞下地として、これに土壁、漆喰壁などで仕上げるのが標準的なものであったが、最近はボードなどを使う乾式構法も見られる。
21. 大壁：壁仕上げ材で柱を隠す壁構法。⇔真壁
22. 床の間や書院窓の上に架けわたす横木。
23. 柱と柱を繋ぐ水平材。
24. 床脇の採光のために開けられる穴。
25. 展望室を除く。
26. 明かりをとるために薄い紙を張った障子。
27. 床の間の壁面上部に設置される木板。壁と掛軸の間に空間を作り、掛軸が壁に擦れて傷むのを防ぐ。ここに釘等を取り付け、軸を掛ける。
28. 違棚（床脇）の下などに、地板に接して設けた小さい戸棚。

参考文献

◆単行本

- 太田博太郎『床の間：日本住宅の象徴』（岩波新書 黄68）岩波書店、1978年。
- 村松貞次郎企画編集『日本の建築：明治大正昭和』（全10巻）、1979-1982年。
- 伊藤ていじ編『書院と民家』（日本の美と文化シリーズ、11巻）講談社、1983年。
- 村松貞次郎・近江栄編、青木信夫ほか著『近代和風建築』鹿島出版会、1988年。

日本美術学会編『日本近代美術と西洋：明治美術学会国際シンポジウム』明治美術学会、1992年。

藤森照信『日本の近代建築』上下巻、岩波書店、1993年。

初田亨『職人たちの西洋建築』（講談社選書メチエ 95）講談社、1997年。

和風建築社編『床の間』（和風建築シリーズ）建築資料研究社、1998年。

藤田勝也、古賀秀策編『日本建築史』昭和堂、1999年。

太田博太郎監修『日本建築様式史：カラー版』美術出版社、1999年。

増田彰久『棟梁たちの西洋館：文明開化の夢とカタチ』中央公論新社、2004年5月。

青森県環境生活部県民生活文化課史編さんグループ編『青森県の暮らしと建築の近代化に寄与した人々』（青森県史叢書；平成18年度）青森県、2007年3月。

小沢朝江『明治の皇室建築：国家が求めた「和風」像』（歴史文化ライブラリー263）吉川弘文館、2008年。

◆辞典

『建築大辞典』彰国社、1993年。

◆雑誌

『日本の美術：床の間と床飾り』No.152、至文堂、1979年。

『日本の美術：擬洋風建築』No.446、至文堂、2003年。

◆論文

前田健次郎「床の間に就て」『建築雑誌』19巻220号、254-263頁、1905年4月。

太田博太郎「床の間と玄関」『建築雑誌』68巻797号、9-12頁、1953年4月。

今井善一郎「床の間の問題」『日本民俗学』2巻3号、59-62頁、1955年1月。

◆展覧会・展覧会図録

横浜都市発展記念館「横浜建築家列伝：開港150周年記念」展、2009年4月25日～8月30日。

横浜都市発展記念館編『横浜建築家列伝：開港150周年記念』横浜都市発展記念館、2009年4月。

【図一覧】いずれも執筆者撮影(撮影日：2009年11月6日)



図1 外観



図2 庭園



図3 客間



図4 狎潜<客間>



図5 透かし<客間>

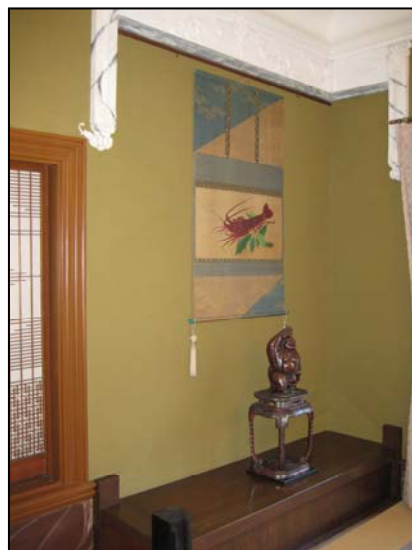


図6 主人室



図7 婦人室



図8 漆喰<婦人室>



図9 天井<婦人室>

たばた かおり／お茶の水女子大学大学院 人間文化創成科学研究科 比較社会文化学専攻
生活文化学コース 博士前期課程2年